「学・官・民」連携による資料保全
―― くりでん資料保全の現在 ――

蝦名裕一

●●●・・

はじめに

歴史資料とは地域の文化遺産であると同時に、一方では恒常的に処分・散逸といった消滅の危険性にさらされている。ゆえに、その時代において役目を終えた歴史資料を保全し、未来に継承するためには、同時代に生きる人間による努力や工夫がなされなければ実現しえないものである。また、大量の歴史資料の保全は、個人レベルでの努力や工夫ではおのずと限界がある。歴史資料を末永く未来に継承するためには、これが社会システムの中に組み込まれ、後世に継承されていくことが必要となる。

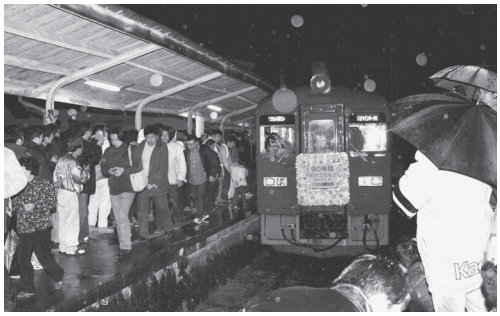
本報告では、かつて宮城県栗原郡地域を運行し、平成 19 年（2007）に廃線となったくりはら田園鉄道株式会社（略称くりでん）が保有していた大量の歴史資料について、平成 22 年度（2010）に実施されている資料保全活動の事例を紹介する。これをふまえて、歴史資料を未来に継承するための「学・官・民」の連携モデルを提唱したい。

1　くりでん資料保全活動までの経緯

1　くりでんの歴史

まず、くりでんの歴史の概要を以下に述べておきたい。大正 7 年（1918）、中村小次郎を初代社長として、栗原地域の馬車軌道を鉄道に切り替え、栗原軌道株式会社が設立された。同社はその後、昭和 16 年（1941）に栗原鉄道株式会社、昭和 30 年（1950）に電気化して栗原電鉄、平成 7 年（1995）に再び気動車運行となりくりはら田園鉄道株式会社へと変遷の道を辿った。その路線は、現登米市となった石越町、現栗原

創立時の栗原軌道株式会社



くりでん最終列車（平成 19 年 3 月 31 日）

市となった若柳町、金成町、栗駒町、鶯沢町の計5カ村にまたがっていた。くりでんは同地域の旅客輸送とともに、旧鶯沢町の細倉鉱山から産出される鉱山資源の貨物輸送を担ってきた。

しかし、1960年代の高度経済成長期、モータリゼーションの展開と自家用車の普及によって、くりでんの利用者数は次第に減少することになった。加えて、昭和63年（1988）に細倉鉱山が閉山し、経営はさらに悪化していった。平成7年（1995）に沿線自治体の協議により第3セクター方式で鉄道路線が維持されたが、平成16年（2005）年の株主総会にて営業廃止が決定され、平成19年（2007）をもってくりでんはその90年の歴史に幕を閉じることになった。

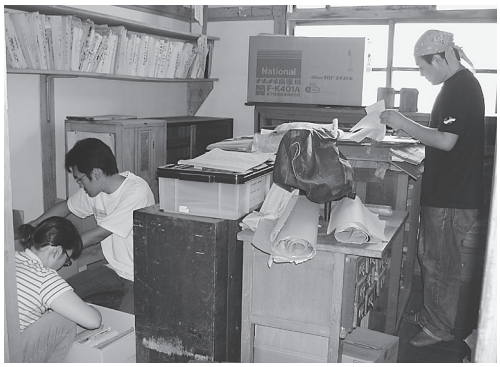
くりでんは、列車間の安全確保のためのタブレット式閉塞や、レバー操作による腕木式信号機といった独特な運行をおこなっていた鉄道であった。また、栗原地域の田園風景の中をひた走る情緒を有したくりでんは、日本全国の鉄道ファンから注目を集めた。平成19年（2007）の廃線時には、廃線を惜しむ地域住民や鉄道ファンを中心にくりでんを再評価する気運が高まり、夕方ワイド番組によるイベント列車の走行が催され、収益も通年に比べて倍増することになった。最終列車の運行時には大勢の地域住民や鉄道ファンがホームに参集し、くりでんとの別れを惜しんだ。こうした最終走行時にみられたくりでんブームの様相は、この鉄道に対する関心の高さを物語るものであった。

2　くりでん資料の整理開始

今回のくりでん資料の整理保全作業の開始以前、一部の資料についてはNPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク（略称「宮城資料ネット」）が中心となり、整理保全および目録化を実施している。以下にその経緯を述べておきたい。

平成16年（2004）、宮城学院女子大学の大平聡教授がくりでんの資料群に着目し、これが近現代の鉄道史および地域史にとって重要な意義をもつ存在であることを提唱した。大平氏の呼びかけをうけて、平成17年（2005）より宮城資料ネットの会員である宮城県近郊の歴史研究者と大学院生によって、くりでん資料の調査保全活動が開始された。

宮城資料ネットによるくりでん資料の調査保全活動は、平成17年（2005）から翌18年（2006）の2年間で計4回実施された。この作業では、主に本社2階に保管されていた非現用資料について整理保全作業を実施し、資料を1点ごとに中性紙封筒への収納したうえで目録を作成した。加えて、本社内の資料保存状況を概観し、平成19年（2007）3月に『資料保全活動の報告書』として刊行した。この目録では、くりでん資料を資料ごとにタイトルをつけ、年代、個数などを記すとともに、本社内の見取り図を作成した。こうした宮城資料ネットによる先行保



平成17年の調査保全活動

全活動が、平成22年（2010）に展開するくりでん資料保全活動の前程になった。また、鉄道史研究者の調査により、くりでん資料が鉄道史や地域経済史、近・現代の日本技術史にとっても超一級の資料であるということが確認された。さらに、平成19年（2007）に細倉鉱山が経済産業省の認定する近代化産業遺産に選ばれたことから、くりでんの歴史遺産としての価値がクローズアップされることになった。

平成18年（2006）以降、くりでんは精算事業へと移行し、これらの資料は清算会社の管轄となった。通常、企業の清算時において、大量の文書については、処分の対象とされてしまう。しかしくりでんの場合、廃線前から研究者によるくりでん資料の積極的な評価が示された結果、これらを保全していこうという動きへとつながっていったのである。

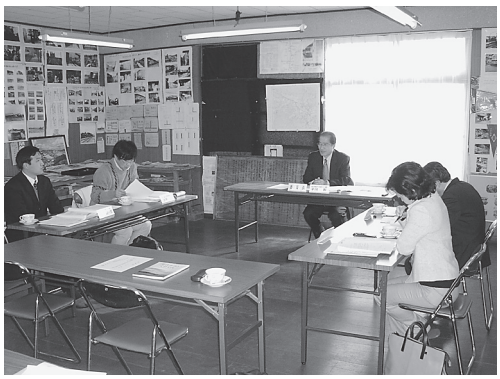
3　栗原市の誕生と検討委員会の設立

くりでん資料の歴史的価値が見直されつつあったこの時期、全国的には自治体の広域合併、いわゆる平成の大合併が展開していた。平成17年（2005）、くりでん沿線の4町を含めた栗原郡10町が合併し、新たに栗原市が誕生した。栗原市では、平成18年（2006）年より栗原地域の自然や歴史を積極的に観光事業に活用していく「くりはら田園観光都市創造事業」を開始した。この中で、地域住民や鉄道ファンおよび研究者から注目のあつまるくりでんに対して、新たな観光資源の候補として市当局の関心が高まることになった。

鉄道が廃線となった後は、通常であれば清算事業において、その施設と車両は処分の対象となる。しかし、くりでんでは清算会社内に「くりはら田園鉄道の資産の保全活用に関する検討委員会」を設置し、歴史、鉄道、観光、行政の各分野から選任された代表者によって、清算後のくりでんの資料の保全と活用を検討することになった。同検討委員会によって示されたくりでん資料の保全の方針は以下のとおりである。

まず、くりでんは廃線後、車両をそのまま展示活用する静態保存と、車両を実際に動かして営業時の様子を再現する動態保存を実施することにした。保存の場所についてはいくつかの候補が挙げられたが、静態保存と動態保存が可能な施設を兼ね備え、また本社や車両庫などの建造物が併設されている若柳駅が選定された。

また、保存車両についても改めて検討がおこなわれた。くりでんが所有していた日本でも希少な大正期の貨車ト10型木造無蓋車、ワフ74型木造緩急車、廃線時に使用されていたKD 95型は、当初より保存が決定されていた。これに加えて、KD 10型や、栗原電鉄時代に使用された戦前と戦後の技術を折衷したモデルであるM 15型などについても、この検討委員会の調査により、その歴史的重要性が指摘された。こ



第1回くりはら田園鉄道の資産の保全活用に関する検討委員会

の結果、くりでんの車両は14両が保存されることになった。また、同検討委員会の分析により、若柳駅駅舎および車両庫が、創建当初から残存する、建築史的にも極めて重要な建造物であることが明らかとなり、これらの建造物も保存の対象となった。さらに、本社などに残る文書資料や物品資料についても、将来の展示活用が期待できる資料群として、保全の対象となった。同時に検討委員会は、文書資料と物品資料の全容を把握するために、資料整理作業を実施することを提案した。

しかし、くりでん資料の保全に向けた検討がされていた最中の平成20年（2008）6月13日、岩手宮城内陸地震が発生し、栗原市は甚大な被害を受けた。この地震により、同委員会の検討委員であった岸由一郎氏と麦屋弥生氏が被災し、亡くなられた。この地震は、栗原市にとっても、検討委員会にとっても痛恨の出来事となった。栗原市では震災復興対策とともに、くりでんの資料保全に取り組むことになったのである。

2　2010年度のくりでん資料整理作業について

栗原市では、くりでんの清算事業を栗原市の企画課で所管し、検討委員会の報告書をうけて、くりでん資料の整理作業に着手した。平成21年（2009）度に厚生労働省が実施した緊急雇用対策を活用し、くりでん資料の整理作業を栗原市の事業として組み込んだ。

平成22年（2010）4月より、くりでん資料の整理および目録作成作業が開始された。この作業では、緊急雇用対策で雇用した市民のうち、5名が専門的に目録化作業に従事することになった。その主な業務は、くりでん資料の目録化と中性紙封筒への収納による整理保全であり、週5日間の勤務でおこなわれた。栗原市では、栗原市若柳支所3階に作業拠点をおき、作業用PCを支給した。この整理作業に、東北大学東北アジア研究センター「歴史資料保全のための地域連携研究ユニット」が協同することになり、宮城資料ネット事務局を務める教育研究支援者の2名がアドバイザーとして赴き、適宜アドバイスおよび目録化のノウハウを指導することになった。こうした形で、栗原市の主導のもと、くりでん資料の整理目録化作業が展開す

目録作成作業

資料は中性紙封筒に収納

ることとなった。

では、実際のくりでん資料の整理作業が、どのように進んでいるかをみていこう。作業開始前、くりでん資料の整理作業において必要となる物品について、以前に調査保全活動を実施した宮城資料ネット事務局と栗原市とで協議して決定した。

くりでん資料の目録化作業において、まず着手したのは資料の搬出であった。くりでん資料は、本社内の各部屋に、多種多様な資料が残されていた。往年のくりでんでは、領収書1枚に至るまで、1年ごとにまとめて冊子を作成して保管していた。こうした几帳面な文書管理が長年続けられたことが、くりでんに大量かつ良質な資料が残ることになった大きな要因といえよう。ただし、くりでんの精算事業は平成22年（2010）8月まで継続しており、未だ現用の資料も数多く残されていたことから、搬出作業では清算事業に関わらない資料を優先的に搬出した。また、文書資料のみならず、貨物車につける車票なども大量に残存しており、これらについても搬出し、保全することにした。結果、当初の予定をはるかに上回る必要物品が生じ、その都度追加申請することになった。これについては、栗原市当局に柔軟な対応をいただいた。

次に、資料の搬出とナンバリングについて述べたい。搬出時には、本社の各部屋に適宜部屋番号をつけ、その部屋番号に基づいて、資料の出所ごとにナンバリングした。これを若柳支所3階へと運び込み、目録化作業を実施した。目録化は、先に宮城資料ネットが実施した整理調査方式を踏襲し、資料ごとにナンバー、タイトルと内容、作成者、年代、数量を記入する形で実施した。なお、今回の目録化作業に従事する市民の方々は、こうした歴史資料を取り扱った経験は無かった。しかし、宮城資料ネットに蓄積した目録作成のノウハウにもとづいた作業に加えて、日々の作業の中でくりでん資料の整理について話し合いながら作業が進められた結果、予想をはるかに上回る速度で作業が進展していったのである。

目録化が済んだ資料については、本社内では湿気の問題があったため、栗原市側に若柳支所3階に保管スペースを確保していただいた。また、カビの発生した資料については、神戸の歴史資料ネットワーク（史料ネット）での水損資料に対する消毒作業の資料を参考にしてアルコール消毒をほどこし、かびを払ったり陰干しなどを実施した。

平成22年（2010）年11月現在、およそ17,000点の資料について目録化、段ボール箱にして約800箱相当の資料について保全作業が完了した。これは当初の想定をはるかに上回る速度での実績である。その要因を挙げるならば、先行する宮城資料ネットの整理調査によるノウハウの蓄積、栗原市による効果的なバックアップ、目録作成に関わる市民のチームワークとい

くりでん資料の状況（平成22年現在）

えよう。言い換えればそれは、「学・官・民」の連携が効果的に機能した結果である。

3 「学・官・民」の連携モデル―くりでん資料整理作業から

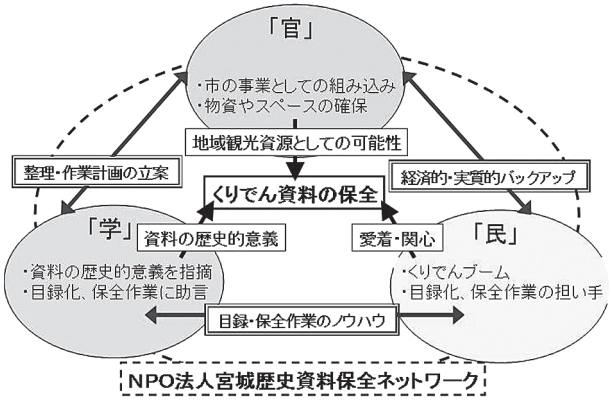
今回のくりでん資料の整理保全作業は、当初の想定を上回るペースで進展しており、「学・官・民」の連携が効果的に作用した例と言い得る。そこで、このくりでん資料整理作業をモデルとして、資料保全における「学・官・民」の協同体制のモデル化を試みたい（下図参照）。

まず、くりでん資料に対しては、「学・官・民」それぞれの立場からのアプローチがあった。「学」である歴史研究者や鉄道研究者からは、くりでん資料の歴史的な意義が指摘された。同時に地域住民および鉄道ファンによる、廃線時の「くりでんブーム」の創出により、くりでんに対する「民」の強い関心や愛着が示された。こうした動きをうけて、「官」すなわち栗原市当局が、資料も地域観光資源として活用する可能性を見いだしたのである。

次に、くりでん資料の検討委員会における「学」と「官」の協議によって、整理作業についての方針がまとめられた。「学」の側では、資料保全のノウハウをアドバイスし、「官」では計画に合わせて、作業を市の事業として組み込み、物資やスペースを確保した。こうして「学」と「官」からのサポートをもとに、「民」である栗原市民が実際の担い手となった。今回のくりでん資料整理の事例では、「学」と「官」のバックアップによって、これまで目録化作業の経験がない「民」であっても、資料保全の大きな担い手となることが証明されたといってよい。

さらに、今回の資料保全におけるNPO法人としての宮城資料ネットの動きを位置付けておきたい。廃線の直前、くりでん整理保全作業に宮城資料ネットを通じて宮城県近郊の研究者が参加した。こうした動きの中で、くりでん資料が第一級の歴史資料であるという共通認識が形成された。また、宮城資料ネットに蓄積された「宮城型」資料保全方法のノウハウ、中性紙封筒への収納、目録化などが、栗原市に全面的に採用された。こうした宮城資料ネットの活動に

「学・官・民」協同の保全モデル



は、「学・官・民」それぞれの領域を結びつけるNPO法人としての特性が効果的に作用していたと言うことができよう。

おわりに

本報告を終えるにあたり、平成22年（2010）6月13日におこなわれたくりでんの動態保存、第1回「くりでん乗車会」について紹介しておきたい。この日は3年前に岩手宮城内陸地震が発生した前日にあたっていた。くりでんの再出発は、地震災害から復興する栗原市を象徴するものとなったのである。出発式では地震で犠牲となった方々への黙祷が捧げられ、佐藤勇栗原市長と平川新宮城資料ネット理事長から、新たな地域遺産として生まれ変わったくりでんの第一歩である旨が述べられた。

この乗車会は、栗原市を主体として、くりでんOBおよび地域住民のボランティアによって開催された。当日、若柳駅にはくりでんの再出発を待ちわびる500名以上の市民が集まり、乗り切れなかった人のための増発列車を運行するほどの盛況ぶりであった。なお、出発式前の整理作業で、往年のくりでんの写真が発見されたため、デジタルカメラで再撮影し、栗原市職員の方にお渡しした。その写真は、当日ラミネート加工をして若柳駅構内に展示をしていただいた。その光景は、さながら過去と現在のくりでんの姿がオーバーラップしたようであった。今後も続けられる整理保全作業の傍ら、このような資料の展示活用についてもアイディアを蓄積していきたい。

今回の報告で提唱した、くりでん資料整理作業を例とした「学・官・民」の連携モデルは、未だ試論の段階である。今後は、こうした資料保全のモデルをさらに深め、「学」と「官」と「民」、それぞれにとってよりよい資料の保全方法、さらには資料の活用方法を考えていかねばならない。今回の報告は「学・官・民」連携による資料保全であったが、次なる機会には「学・官・民」連携による資料活用、というかたちで報告をできるようにしたいと考えている。

第1回　くりでん乗車会

再び動き出したくりでん